

# ふれあいのひろば

## 敬老会

平間中学校体育館  
9月19日

残暑の厳しいなか午前10時から平成23年度敬老会が開催されました。70才以上の方達の一五八人が参加されました。第一部の式典では来賓の挨拶に続き、下河原小学校の校長と教頭、生徒代表の挨拶があり、お年寄りあての手紙を渡されました。第二部の演芸も盛大に華やかに催されました。

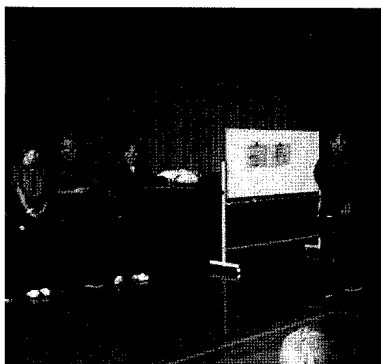


米寿にお祝・花束贈呈  
(小島副会長から)

約70人が参加して上平間の上平間第三町会、伊勢浦町会、五瀬淵住宅自治会、上平間第二町会の四町会が連合して開催いたしました。当日は中原消防署の山口署長がお見えになり救急救命訓練の大切さを強調され、婦人消防団の皆様のご指導を受けました。(防災部)

## 市民救命士講習 70人受講

9月11日 平間中学校



山口中原消防署長あいさつ



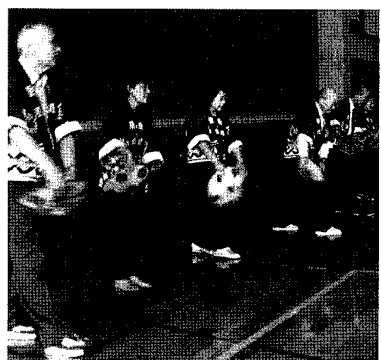
7班に分れて個別に訓練



熱心に説明を聞く参加者



下河原小学校(校長・教頭・生徒代表)のお祝の言葉



町会役員の花笠音頭



## かわら版

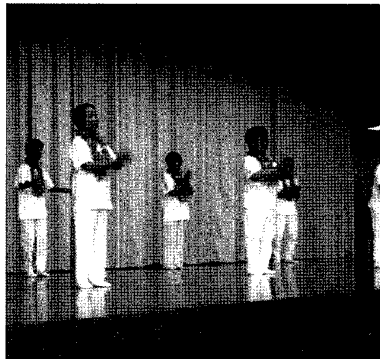
平成23年10月1日発行  
上平間第二町会  
編集責任者 堤 秀 夫  
印刷所 長谷川印刷(株)



体育館一杯に展開



四町会合同参加の講習会



ゆりの会の踊り・持木幸子さん他



フラダンス・近藤智子さん他



婦人消防団の指導



実習展開

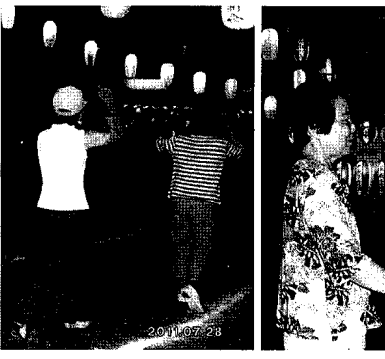


上平間第二老人クラブ・青木会長他



平間中学校・吹奏楽部の演奏

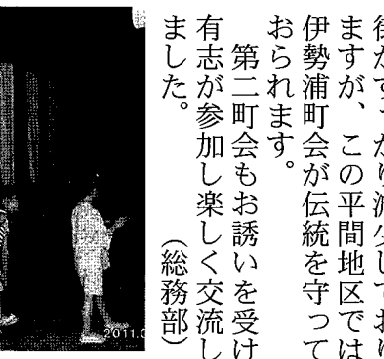
**納涼花火大会 7月17日**  
親子三〇〇人以上鑑賞  
薄暮の中で準備をすすめ、日没を待つ打上げが開始されました。町会の青少年部や婦人部を中心として、来賓の接待や、参加者にかき氷のサービスを行いました。夏のひとときを楽しく過ごしました。(青少年部)



第二町会有志



子供達の楽しい様子



第二町会有志

## 伊勢浦町会の盆踊りに参加 7月28日

最近盆踊りを開催する街がすっかり減少しておりますが、この平間地区では伊勢浦町会が伝統を守っておられます。第二町会もお誘いを受け有志が参加し楽しく交流しました。(総務部)



かき氷のサービス



日没を待つ参加者

## 夏休み親子ふれあい 工芸教室 7月10日

お父さん、お母さんに連れられ沢山の子どもさんが参加しました。日頃、このような機会がありませんので、真剣に取り組んでいる様子がいじらしく見えました。親子の絆がしっかりと結ばれた教室でした。(婦人部、文化部)



父親と参加



母親と参加



作品の仕上げに入る



真剣に取り組む参加者



## 随筆 ある日

鉛筆が鉛筆削り器にかからない程短くなりました。そこでポイと捨てられぬ私です。また六糎もある、まだ書ける、何とか削れないかと思廻しても、カッターナイフ、果物ナイフ、包丁、どれも具合が悪いのです。それでふと思いついた切出しナイフ、若い人に解るでしょうか、鉄の平らな棒の先端を斜めにする

く削って刃をつけたものです。どこかにあった筈と探して見つけました。五十年以上前、働いて居た工場の工具さんがそこら辺りに落ちて居た鉄棒を拾って来て、グラインダーであつと云う間に削って作ってくれたものです。私にもあんな若い頃があつたなど、そしてその工具さんの丸いやさしい顔を懐かしく思い出しました。 松 苑



歩こう会に臨んで

草薨 貞夫



今回、町会趣味の会の一環として「皆さんで楽しく歩く会」を発足、目的は、健康で元気に楽しく一日を過ごすことにある、そこで初歩きで選ばれたのは鎌倉コースで、七月三日午前九時、新川崎駅集合、当日一七名の参加者があり、横須賀線で大船、そこからモノレールで湘南江の島へ、一寸早めであったが、腰越港で全員しらす丼で昼食を取り、その後、民家の軒先をかすめての江の電で、緑を背に建つひなびた木造駅舎は昭和の面影を今も残し、関東の駅一〇

思い出のコーナー 私の青春時代

森 善一郎



昭和十九年九月十五日父が大東亜戦争に召集され会津陸軍師団に入隊、父は四二才私は十六の秋でした。戦争は激しくなり、私は三菱重工第一工場で研摩工として海軍快速艇のエンジン千馬力のクランクシャフト



「選」にも選ばれた極楽寺で下車、そこから成就寺、極楽寺等、そこち紫陽花が目に保養を与えてくれ、江の電の線路に面してしばらく歩き、その先の木立のある文学館でしばしの休息を取り、そこからさらに由比ヶ浜通りを進み一路鎌倉方面に向かった。当日は予報に反し強い日ざしが容赦なく照り返し、かなり体力の消耗が激しかったと思われ、実のところ途中で音を上げる人も出るかと思いきや、その心配もなくお互い声をかけあい、誰一人脱落することなく、到着、鎌倉駅までの二時間、全行程を全員無事歩き抜きました。初めての挑戦でしたが楽しい体験をしてきました。

の研摩作業を日夜増産体制で働いて居ました。昭和二十年になって日本内地に米軍機が飛来し空襲警報が発令し始めた、三月十日夜東京大空襲があり東京下町が焼失、約十万人が犠牲になった。私は母親と弟二人を父の実家福島県伊達郡に疎開させ、私と弟は平間の家に残り働き弟は通学、家族が三ヶ所に分散、父は戦場、母弟達は福島、私達は平間で生活中四月十四日夜九時三十分警戒警報が発令、間もなく空襲警報になり川崎方面よりB29が飛来し焼夷弾を投下、平間地区全体が大炎災となり皆んな安全地帯多摩川土手方面へ逃げた。我家は幸い焼夷弾の直撃は無く、北隣の田島家は二階で直撃を受け燃上がり、我家に火の粉が降りかかり熱で窓ガラスが破れ火粉で障子に燃え移り火災寸前、我家の前に大きな池があり池の水をバケツで汲み家中一面

釣りの会

7月29日金 横須賀三春町



海辺つり公園にて、午前7時30分着にて、一日釣行ない、会員全員がサビキ釣り。イワシを一人平均50尾を釣りました。これは、釣りの会が始って以来の大漁です。全員が大喜びです。参加者9名。 鈴木 治夫

と北側の羽目板に懸命に水を掛け火災を防ぎ、十五日午前三時頃大火災が治まり、私は体が疲れ腰を落ししやがみ込みました。午前四時頃弟を探しにガス橋方面で探したが居ません。我家へ帰り朝五時頃弟が帰って来て無事で良かったと抱かれました。五月二十五日にも空襲があり、伊勢浦地区も焼夷弾による大火災になり二度恐ろしい体験をしました。戦争は更に激しさを増し、日夜空襲に合い工場で作業中も加瀬山防空壕に避難したり、六月には連夜川崎工場地帯を爆撃され、非常に不安な日々でした。八月十五日玉音放送を社内で聞き、敗戦を

短歌

小雪舞ふ里を襲ひし大津波 瓦礫の山に秋の風立つ 球児等の夏燃へ上る甲子園 勝利の歓声去りゆく涙 七年の暗き地下より抜け出でて 生命燃すか八日目の蟬 茂木 久夫

三角に連なるあれは雁なるや 夕日は見えぬ雲ただ茜 秋の夜に服の戸棚へ入る夢 捜すは母の手縫いのコート 人に似る流木のあり腰おろし 水に向かいて何を語り 松森 礼子

知り皆んな泣きました。私は八月末で退職し、十月に村田組の世話で古河製造運輸部でトラックの助手として働き、家族6人の生活を守る為十八才で運転免許受験資格を得て昭和二十一年八月一日、中原警察署で自動車運転免許書を受理。家族の生活を守る為、大型トラックを運転し日夜働き、昭和二十二年私が十九才の春、父親がフィリピンにて戦死の知らせがあり、家族悲しみ泣きました。父親の兄と私で福島県地方世話部へ遺骨の引取り葬儀を済ませ法田寺に埋葬。私は二十九才迄運転手として務め、以後大型ダンプカーを購入、日夜働き十六才より六十五才迄五十年間働き、現在の生活環境を作り今日に到りました。八十二才これからの余生を楽しくゴルフや海釣りに老春を送っています。

俳句

天神台句会 (八月二十四日)

霧立ちて平伏し登り天仰ぐ 古池やアメンボ泳ぐ音もなし 雨上がりミミズ這いだしもがきおり 青木 源司

高齡者油断大敵熱中症 サンングラスかけて気持が若くなり 猛暑日の続きで狭庭草茫茫 荒井 スミ 久しぶり河岸に立てば鶉の散る 朝顔の咲いて迎える退院の日 曲り角暑さに耐える百日紅 梅田 松男

草の花いろいろ摘んで帰ろうか 向日葵や握り拳の置き処 化粧して誰を迎える夕化粧 佐藤 輝之 十度の差昨日の汗はどこへやら 夏草の茂るにまかす老の庭 鬼灯を買いたる友とはぐれけり 四津田富美子 門火焚く佳き顔々の今は無く 蝉しぐれ降る公園に果つる蟬 母を継ぐ今年も藍の夏のもの 高山 房子

詩

円筒分水 リュウ

水は四方に流れ落ちて 落ちたまことにゆるやかに 川の中には鯉が 泳いでいる 黄鵠が一番

公園 リュウ 鬱蒼として 公園は 噴水が 噴水であることを止めている

懐かしの小学校時代 終戦翌年の昭和21年多摩川は未だ水がきれいで、潜つて上を見ると空を飛ぶ鳥の姿が見えた。蛭やハゼもいた。この年、私は小学校6年生で藤沢の学校から御幸小学校へ転校してきた。最初は空襲で校舎が消失して、南河原小学校に居候だった。授業は二部制で男女が午前番と午後番に別れて交替で学校に通った。

ペンチも 草に埋もれて 自分を忘れてしまったらしい 鳥は鳴く 花も何か咲いている

入口でわかるのは それだけで 見えない鎖が封鎖しているのだから やがて 夏は枯れ 落ちるべきものが落ちつくし 倒れるものは倒れつくす

揺れないぞ！と先生が言う と生徒はワッと一斉に歓声をあげた。汽車などほとんど乗った経験の無い子供達だったからである。強羅から若ノ湖畔まで大 自然の中を歩き通したので、子供にとっては大旅行だった。帰りが遅くなったので、父兄が心配して集まって待っていたのを覚えている。あの時の30人近く居た同級生の消息は遥として知れない。親しかつた箱崎某は高校を卒業した直後に家出して行方が知れず、父親は自分自殺したのだと思うと私の顔を見て泣いた。私もそれを覚えて泣いた。

喜寿を迎えた今頃になって何故60年以上も前の出来事が懐かしく思い浮かぶのだろうか。老人は過去の思い出の中に生きると言われる。私も例外ではあり得ないのだ。 蜃気楼